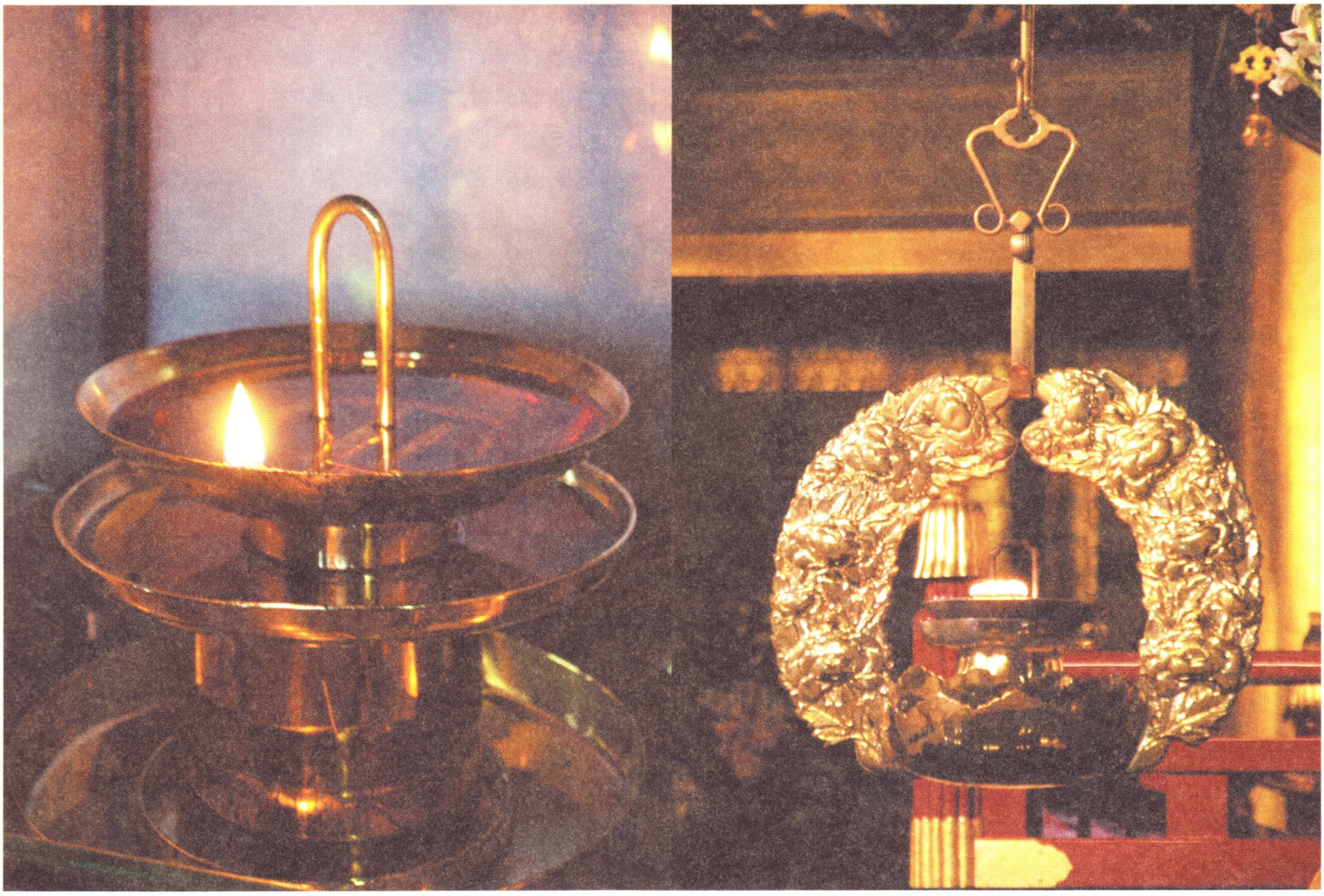
ISSN 2185-2413

親鸞聖人750回大遠忌

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター

特集：盆踊りの 今（いまむかし）昔



2010.6 第11号

はじめまして、儀礼と申します

気持ちの切り替えスイッチ

みなさん、部屋の模様替えをしたくなるのはどんな時ですか。使い勝手という実用性重視の場合もあれば、気分転換にという時もあるでしょう。このように、身の回りを整えると、快適になるだけでなく、気持ちも改まりますね。もっと身近な例でいうと、スーツなどに着替えると仕事モードになりませんか。このように、着替えをしたり身の回りを整えることは、とても簡単で日常的な、気持ちの切り替えスイッチなのです。

荘厳の力

この切り替え作業を、宗教的空間に置き換えると、どうなるでしょう。まず、お寺は外観からして普通の住宅と異なります。本堂には彫刻や色彩がほどこされ、また、芳しいお香などが厳かな雰囲気を醸し出しています。なんとなく、行儀良くせねばという気持ちになりませんか。特に、本堂で子供がはしゃぎだすと、たいていの親御さんは注意されます。これは、本堂という空間がただの大広間ではなく、特別な場と感じられているからでしょう。

このように、宗教的空間を整えることを「荘厳する」といい、その場にいる人々が、聴聞する体勢に切り替わるスイッチとして働いているのです。

日常の作業こそ

荘厳された本堂という空間は、建築全体を使って、仏さまと向き合えるような雰囲気を演出しています。このような宗教的空間への切り替えは、お寺に限ったことではありません。家庭では、仏間やお仏壇がそれに当たります。お仏壇を掃除し、お花の水を替え、蝋燭に灯を点し、お線香を焚くという、毎日のなにげない行為に、実は、同じような切り替えの意味があるのです。

仏にまみえる

そろそろ、空間や外見を整えるということが、実は「心を整える」ことだとお気づきの方もいらっしゃるでしょう。僧侶はお寺という空間を整え、仏法と出遇うにふさわしい場を創りだします。お参りに来られた方は、その空間が醸し出す雰囲気に包まれ、仏にまみえるのです。

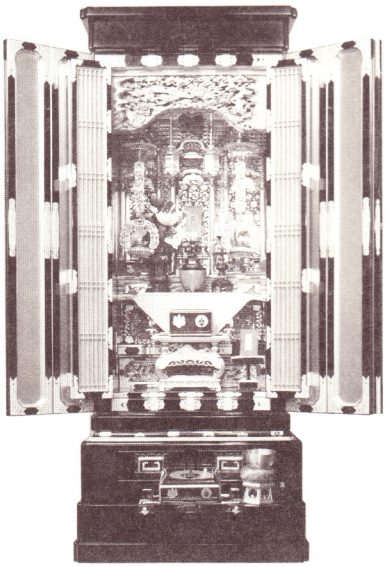
家庭のお仏壇では、どうでしょう。みなさん、お掃除をしているうちに、日常の喧騒から心が離れていき、知らぬ間に時間が過ぎ去っていた、というような経験はありせんか。美しく整ったお仏壇にお参りすると、実に清々しい気分になりますね。このように考えますと、人は荘厳という儀礼的要素にずいぶん影響される、ということが分かります。美しく整った空間で、清々しくお参りする時間を大切にしたいものです。

このように宗教儀礼とは、心地良い場を創出し、心を整え仏にまみえる、周到な仕組みといえましょう。

スイッチは使うためにある

お寺やお仏壇にお参りする時、心のスイッチ、切り替わっていますか。ぜひ、今日から意識して、その場の雰囲気を味わってみて下さい。意識しつづけることによって、自分の心の状態がわかってきます。そしていつの日か、その心の切り替えスイッチが、実は、仏さまによって用意されていた、と気づかされることでしょう。

（常任研究員　多村至恩）



提供：浜屋株式会社

目　次

◆はじめまして、儀礼と申します　2頁
◆本願寺茶房（第2回）―― 荘厳の力〈前編〉　3頁
◆盆踊りの 今（いまむかし）昔　6頁
◆タイムスリップ大遠忌 ―― 650回忌編　8頁
◆親鸞さまの道　10頁
◆センター所長だより　11頁
◆表紙写真の解説　12頁

対談　本願寺茶房　第2回

亭主 大村英昭が不定期に開く本願寺茶房。ここは、1日1客限定、しかもお気に入りの客人しか呼ばないという、ちょっと変わった処です。アカデミックな話を好む亭主が、最近関心をよせている《儀礼》について語りあう場として開きました。今日は、天岸浄圓さん（行信教校講師）を客人として、話が盛り上がっているようです。

荘厳の力〈前編〉
―仏法との出遇い―

亭主　大村英昭
客人　天岸浄圓

〈ドラマの始まり“三奉請”〉

大村：天岸先生は『法事のドラマ』という本の中で、法事とは非常にドラマチックな儀礼表現だということを、端的にご説明くださいました。今日は、その点についてお尋ね申し上げたいと思います。

天岸：法要やご法事がつとまる最初に、三奉請をおつとめします。これは「弥陀如来、道場に入りたまえ」と請い奉りますね。そして「散華楽」とは、花を散らせて、お荘厳しますとか、お敬い申しますというような意味でしょうね。それをまず、阿弥陀如来に申し上げ、お釈迦さまに申し上げ、そして十方諸仏をそこへお招きをして、このご法要のところ（道場）においでくださいと唱えるわけです。

そして、弥陀、釈迦、十方の諸仏方がまします前で、法要の趣旨をお聞きいただきますようにと言上します。すると今度は、お導師（僧侶）が如来さまに成り代わって、「仏説無量寿経」とお説教するんですよ。勤行という、お説教をするわけです。

〈儀礼執行者としての心構え〉

大村：ええ。そして、最後に「願以此功徳 平等施一切」という言葉でお勤めが終わりますね。如来さまは、いつでもどこでも私達を包んでおられるのに、なぜ今更、迎えないといけないのか。また、阿弥陀さま一仏でいいのだったら、なぜお釈迦さまなどを迎えるのか。そして、三奉請で迎えた諸仏はどこへ帰られるのか、という疑問を以前ぶつけられたことがあるのですが。先生のご意見は、いかがでしょう。

天岸：そのような疑問を抱える住職さんには、三奉請や「願以此功徳」という回向の言葉を読むときに、きっと、ある種のわだかまりがあるのでしょう。そして、そのわだかまりが、ドラマに不可欠なパフォーマンス性にブレーキをかけている、と言ってもいいだろうなと思うんですね。

大村：確かに、この辺をうまく解決しておかないと、腰が引けるといいますか。何か知らないけどやっているというような、宗教儀礼を執行する者としてのパフォーマンスといいますか、自信と責任が揺らぐわけなんですよね。

〈往生安楽国〉

天岸：この場合の回向とは、仏さまに回向するとか、死んだ人に回向するのではなくて、よそへ伝える

客　人　天岸浄圓

という意味なのです。阿弥陀さまの素晴らしさを、隣の方へお伝えしましょう。そして、あなたの功徳というのは、自分が読んだということではないのですよ。お経（説法）で、教えてもらった素晴らしさということなのです。

お説教を聞かせてもらって感動した喜びを、ご縁のある人も、ご縁を欲する人にも同じように、分け隔てなしに伝えましょうね、というのが「平等施一切」なのです。そして、伝えた側も、聞いてくださった側も、同じように菩提心を起こして、仏さまを目指させていただこうというのが「同発菩提心」で、そのような気持ちをもって、共々に安楽国を目指して生まれていきましょうというのが、最後の「往生安楽国」なのです。

まあ、これを聞いてくださったら、仏さまも安心して帰られると思うんですけどね。「ああ、そうか、わかったか。よっしゃ、よっしゃ。ほんなら、わし帰るわな」というような形でお帰りになると思うのですが。これで、ちょっとつじつまが合うかなと思うのですけれども。

〈自力アレルギー〉

大村：先生のお話をお聞きして、なんだか大変嬉しくなってきました。しかし、他力を強調する宗義ですので、儀礼というと、すぐにそれは「行だ」、「自力だ」という声を、それでもなお、聞くのですが。

天岸：私をお助けくださるみ教えとは、如来の本願力である、ということを明確にするジャンルを、安心門といいます。このように、如来の本願をよりどころにした時には、一切の自力は否定されるわけですね。だって、一切の自力を否定しませんと、平等に救うということは成り立ちませんからね。

大村：そこではじめて、救済が成立するわけですね。救済が成立しますと、その人の信仰も成り立ちます。信仰が成り立つと、今度は阿弥陀さまを、尊いお方、お救いくださるお方、私を導いてくださるお方として、仏さまとのお付き合いが始まるわけですね。

〈安心門と起行門の混同〉

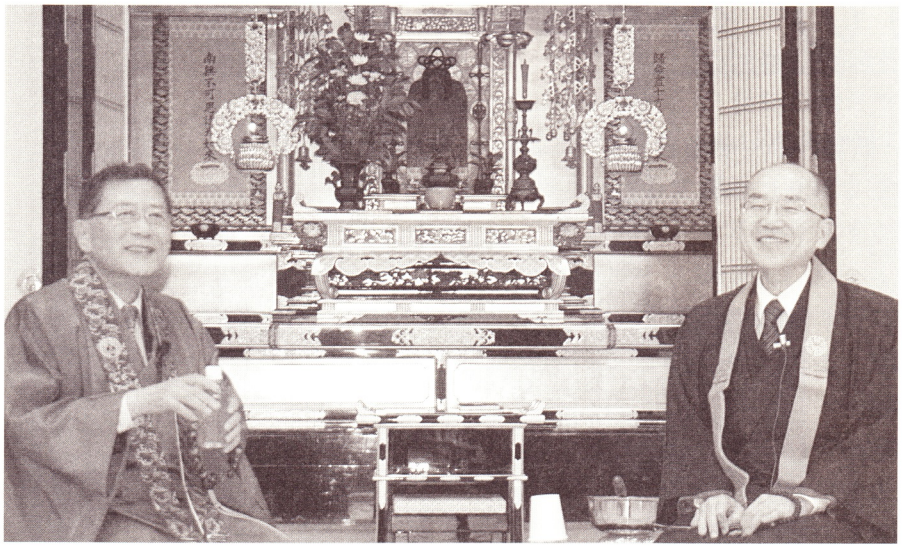
天岸：真宗の特徴でもありますが、救いについて明確にする時は、超日常的に語ります。しかし、この仏さまとのお付き合いについては、日常性に戻ります。具体的に言いますと、安心門という理屈からだと、お仏飯は要らないでしょう。親鸞聖人のご命日だからといって、お精進させていただく必要もないでしょう。このような発想が出てくるのは、日常性の中なのです。この日常性での働きを、起行と呼んだのです。“仏教者としての行動を起こす”ということです。

大村：では、儀礼を行や自力とするのは、間違いなのですね。

天岸：儀礼は、日常の中で行なわれるものです。日常に戻ったからといって、仏さまにお救いいただけるか否かという問題は、かかわっていきません。なぜなら、その行為は、すでに仏さまというお方とお出遇いした上での緊張感であり、喜びでありますから。

信（仰）を確立する時は、信者であるか否かが問題なのです。ですので、安心門とは極論になるのです。しかし儀礼とは、信者になった上で、仏さまとのお付き合いをするということですからね。安心門と起行門を混同させないようにと整理した結果、安心門の方を重視した。その結果、儀礼がうまく機能しなくなっているのが、浄土真宗での現状ではないでしょうか。

大村：では、起行という面から“お荘厳”を考えると、どうなるのでしょう。（この続きは、次号にて）



天岸淨圓（あまぎし じょうえん）

1949（昭和24）年、大阪府生まれ。龍谷大学文学部真宗学科卒業。本願寺派宗学院終了。行信教校研究科卒業。本願寺派輔教。本願寺派布教使。行信教校講師。浄土真宗本願寺派西光寺住職。著書『浄土真宗の行き方』（探究社）、『お彼岸と私』（本願寺出版社）、『蓮如上人のキーワード』（本願寺出版社）、『法事のドラマ』（浄土真宗本願寺派大阪教区）他多数。

亭主のほっと一息

蓮如上人500回遠忌を前にして、大阪津村別院から『法事のドラマ』と題した冊子が刊行され、大阪教区の全寺院に配布されたことがありました。ただ、奥付けには「蓮如上人顕彰委員会」とあるだけで、執筆者がどなたであるのか、当時は判らなかったのです。ために、なんとなく気になってはいたのですが、まァ一読しただけで終わってしまうようなことでありました。

ところが、その後、専門の社会学の側から、儀礼をドラマ論的に考えると良いことに気付きまして、そういえば『法事のドラマ』という本があったなァと、あらためて見直すことにもなったのです。そして、実は、天岸淨圓師がほとんどお一人で書かれたものであることも判りました。で、そうなりますと、真宗儀礼を問いかけるこの「茶房」にも是非お招きし、もっと詳しいお話を聞かせてほしいと願った次第です。

今回は対談を公開するという、新たな試みも加わったのですが、さすがは達人、けっこう難しい内容も、ご来場の方々にもわかるよう噛みくだいてお話しくださいました。加えて、こと儀礼表現に関しては、門徒方とはちがった役柄を担っていただきたい僧侶方が、にも拘らず、ご自身の儀礼執行に際して、なぜ自信がもてないのか・・・。その原因は「安心」と「起行」との混同からくる一種の“自力アレルギー”があるからでしょうと説明された辺り、とくに僧侶方には、じっくり味読していただきますようお願いいたします。

大村英昭（おおむら えいしょう）

1942（昭和17）年、大阪府生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。社会学博士。大阪大学名誉教授・関西学院大学教授。浄土真宗本願寺派圓龍寺前住職。本願寺仏教音楽・儀礼研究所客員研究員。著書『臨床仏教学のすすめ』（世界思想社）他多数。

2010年度 研究スタッフ

所　長　小野　功龍（雅楽研究）

〔儀礼部門〕

常任研究員　多村　至恩（宗教社会学）

研究員　大田壮一郎（歴史学）

客員研究員　大村　英昭（宗教社会学）

杜多　隆信（勤式）

委託研究員　轡田　智文（勤式）

武山　晃隆（真宗学）

直林　不退（歴史学）

山田　雅教（歴史学）

（各五十音順）

特集　盆踊りの 今（いまむかし）昔

お寺の夏の風物詩 —— 盆踊り。歓喜の踊りとも言われています。今回は、念仏と踊りが出遇った頃を彷彿とさせる盆踊りを紹介しながら、仏教文化と儀礼の関係に触れていただきましょう。

お盆の由来

お盆の時期に、先立たれた方を供養するという習慣は、『盂蘭盆経』に基づいています。この経典は、サンスクリット原典やチベット語訳が存在しないので、インドで成立した話が中国に渡って、人々に受け入れられやすい内容に変化した経典（中国撰述経典）と考えられています。

内容は、釈迦十大弟子の一人、目連尊者が餓鬼道に堕ちた母を救おうとしたことに始まります。食べ物や飲み物が炎と化して飲食できず、骨と皮ばかりになって苦しむ母を救おうと、目連尊者がお釈迦さまに尋ねると、「夏安居（毎年４月～７月 インドの梅雨にあたる時期、僧侶が一箇所に集まって修行する）の最終日にあたる７月15日に、そこに集まっている僧侶に供養すると良い。そうすることで、七世の先祖が幸せになる」と説かれたことから、「お盆」（宗派によっては、施餓鬼供養とも言います）という習慣が生まれたのです。

竹富島の盆踊り

歓喜の踊り

「お盆に供養することで、先祖が救われる」というお釈迦さまの言葉に、目連尊者や人々はとても歓びました。そして、歓びのあまり思わず踊りだしたことが、のちの盆踊りとなったのです。この“歓喜の踊り”は、我が国の場合、当初は宗教儀礼として行われましたが、時代が経つにつれ、芸能へと姿を変えました。しかしそれが、かえって大衆に受けたのでしょう。時代を越えて現在まで、夏の風物詩として継承されています。

本願寺由来の盆踊り

ここで、本願寺由来の盆踊りをいくつか紹介しましょう。

滋賀県坂田郡の行徳寺（現：大谷派）で行われていた「顕教踊」は、第11代宗主顕如上人と大谷派第12代宗主教如上人が同寺に身を寄せた際に、村人が出迎えて踊ったことに由来しています。

また、大阪府貝塚市の「貝塚三夜音頭」は、顕如上人が貝塚に本願寺を移したことを歓んだ民衆によって、三日三晩踊ったことが始まりとされ、1583（天正11）年から続いています。

次に、岐阜県飛騨市の常蓮寺（本願寺派）で行われる「太子踊」は、平清盛に供出させられたという太子自彫の聖徳太子像が、1626（寛永３）年に寺へ戻ったことを歓び始まりました。

さらに、東京都中央区で行われる「佃島念仏踊」は、火事によって焼失した築地別院の再建を記念して踊られたもので、1680（延宝８）年より続いています。佃島念仏踊の特徴は、「無縁仏（精霊棚）」が設けられ、参加者や観光客がお参りしていることです。これらは、いずれも無形民俗文化財に指定され、現在まで伝承されています。

最後に、毎年８月１日に行われる本願寺の盆踊りには、御門主がご臨席されます。記録によれば、第12代宗主准如上人が1612（慶長17）年より盆踊りにご臨席になっており、ここに本願寺と盆踊りの長い歴史をみることができます。

竹富島の盆踊り

竹富島（沖縄県八重山郡）の“ショウロー（精霊）アンガマー”

さて次に、竹富島の“ショウローアンガマー”を紹介しましょう。竹富島では、旧暦７月13～15日の夜９時頃より、集落内の新盆を迎えた家や希望する家の庭先で、踊り手と地謡（歌と伴奏）の一行が、深夜まで踊ります。

現代の盆踊りは、会場の中央に櫓を置き、そこを廻りながら踊ることが多いですが、八重山地方の盆踊りには櫓がありません。というのも、この地方は、移動しながら踊る古い形態を継承しているからです。なので、移動中も三味線や太鼓が鳴り響き、地謡は深夜まで休む間がありません。

歌詞には念仏や供養といった内容が多く、踊り手たちは、網笠、藍染の着物に白い帯、素足にわらじという格好で、お盆に還ってきた先祖や無縁仏を供養するために踊ります。また、踊り手たちが手ぬぐいで顔を隠すのは、「あの世から還ってきた人々」の表現ともいわれています。

毎夜、念仏歌で始まるアンガマーですが、歌詞もヴァリエーションに富んでいます。アンガマーは、先祖を深く敬う八重山文化に、仏教文化が芸能として浸透した証といえるでしょう。

石垣島（沖縄県石垣市）の“ソーロン（精霊）アンガマー”

農民の踊りである竹富島の例とは対照的に、石垣島のアンガマーは士族の踊りとされ、かなり様相が異なります。竹富島と同じく、新盆を迎えた家庭などを回りますが、石垣島の場合は「ウシュマイ（お爺さん）とンミー（お婆さん）が、花笠に色の着物をきたファーマー（子供たち）を連れてあの世から還ってくる」ため、非常に色鮮やかで大人数です。

まず、一行は座敷（仏間）に上がり、ウシュマイとンミーが線香をあげて口上を述べてから、踊りが始まります。途中、ウシュマイ・ンミーがこの世の人（お客さんや観光客など）と問答する芸能が必ず入り、あの世の様子を面白おかしく説明し、人々を楽しませています。

ウシュマイ（左）・ンミー（右）

石垣島の盆踊り（口上を述べる場面）

ワンポイント儀礼

今回は、念仏が芸能と出遇い、広く大衆に受け入れられた事例を紹介しました。芸能化したみ教えやお念仏を、世俗的なものとして認めない風潮はいつの時代もあります。しかし、大衆に伝道する際に、五感に訴えかけるのは重要なことです。お経や御文章など、節をつけた方が親しみ易く、いつのまにか、そらんじていることはありませんか。このように儀礼には、そのルールを厳格に守ろうとする場合と、今回の事例のように、大衆受容の過程で変化する場合があり、どちらが優勢になるかは、時代の要請によることが多いのです。

協力：いんのた婦人会（竹富島）、大川青年会（石垣島）

（常任研究員　多村至恩）

特集 タイムスリップ大遠忌

650回忌（1911年 明治44年）編

大遠忌法要は、長い歴史と伝統に支えられてきました。前号の700回忌編に引き続き、今回は650回大遠忌法要を取り上げ、その意義にふれていただきましょう。

教団の近代化と大遠忌

明治維新と本願寺

明治維新による変革の波は、本願寺にも押し寄せました。神仏分離令による「廃仏毀釈」という言葉が有名ですが、当初、明治新政府は神道の国教化を進めていました。仏教の各派は政府の管理下に置かれ、儀礼や信仰は神道により制限されました。しかし、本願寺は教義との不一致からいち早く離脱・独立し、結局この政策は失敗に終わります。やがて新政府は、限定的ながら信仰・布教の自由を認めることになりました。

教団構造の変化

明治時代に入ると、門跡の制が一旦廃止となり、それにより寺務を司った家来のほとんどが教団を離れ、僧侶が寺務全般を担うこととなりました。さらに、江戸時代から続いた複雑な本末制度を見直し、本願寺と末寺の二種となりました。これらをきっかけとして、やがて日本初の議会制による教団運営がはじまります。今日の宗会制度は、大日本帝国議会開設より約10年も古い、1881（明治14）年以来の長い歴史を持っているのです。

明如上人

この激動の時代を、門信徒と共に歩まれたのが、第21代宗主明如上人でした。上人は慈善救済事業や刑務教誨など、宗門の社会貢献を積極的に行い、教団の近代化を進めました。こうした姿勢は、今日の教団にも受け継がれています。

近代最初の大遠忌

650回大遠忌法要は、日露戦争後の困難な状況にも関わらず、盛大につとまりました。幕末の1861（文久元）年に勤められた600回大遠忌法要に比べ、50年の間に社会も教団も大きく変貌しました。近代最初の大遠忌法要は、時代が移り変わっても、変わらぬご開山への信仰と門信徒の結束を再確認する機会になったと言えましょう。

明治44年はこんな年

主なできごと

〈世　界〉
- 辛亥革命起こる
- アムンゼン（ノルウェー）、南極点到達

〈生活・文化〉
- 平塚らいてう等『青踏』創刊
- 西田幾多郎『善の研究』刊行
- 帝国劇場完成
- 文部省唱歌（鳩・桃太郎など）
- カフェブーム（銀座「プランタン」開店）

〈ひ　と〉
- 芸術家　岡本太郎生まれる
- 俳　優　川上音次郎亡くなる

650回大遠忌法要がつとまった明治44年は、「大正ロマン」時代の到来を予感させる年でした。東京では、カフェや劇場が登場し、西洋的な文化・芸術が都市を中心に広がりました。関西では前年から私鉄各社の開業が相次ぎ、都市と地方の交流が盛んになりだした頃です。

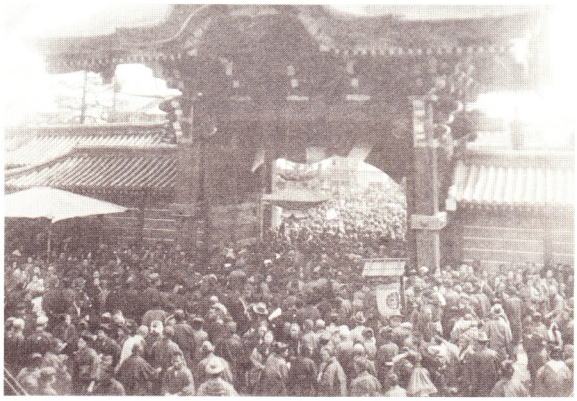
いっぽう、女性の地位向上を目指した平塚らいてうの活動に代表されるように、〈個人〉や〈個性〉に人々の関心が向きつつありました。こうした新たな価値観の登場は、江戸時代から〈家〉を中心に教団を構成してきた本願寺にも、大きな影響を与えるきっかけになりました。それから100年を経た現在、核家族化や個人主義を通り越して〈孤独〉・〈孤立〉が社会問題となっています。公／私や家／個人など、古くて新しい問題を考える時、50年・100年単位で物事を見る目も必要かもしれません。

①開通直後の京都市電（堀川丸太町交差点）

650回大遠忌法要の様子

親鸞聖人650回大遠忌法要は、２期20日間（法要は計10日間）にわたって厳修されました。交通機関が発達したこともあって、参拝者数は予想をはるかに上回り、延べ100万人を超えました。当時の様子を伝える資料から、その熱気を感じていただきましょう。

左：②団参列車を降りる参拝者〔写真中央に「うめこうち」（梅小路）の駅名が見える〕



右：③境内にあふれる参拝者〔境内から御影堂門の方向〕

団　参

今では上山（じょうざん）の形態として一般的な「団参」ですが、団体参拝は大遠忌直前の明如上人七回忌法要（1909〔明治42〕年）ではじめて行われました。当初は、形式的な参拝だと批難する向きもあったようです。しかし、大遠忌法要では毎日全国から数万の門信徒が京都に集まる予定だったので、混乱を避けるため交通機関や宿泊場所の確保が課題となっていました。そこで、全国を29班に区分し、地域ごとに順次参拝する組織的な体制が敷かれたのです。いっぽう、東本願寺では本山が参拝体制を主導するのではなく、各地域が自主的に上山する「集合参拝」が行われました。こんな所にも東と西の違いがあらわれています。

梅小路停車場

この大遠忌法要の盛大な様子を物語るのは、なんといっても臨時鉄道駅の設置でしょう。他派・他宗の大遠忌が重なった事情はあるにせよ、参拝用に駅まで設けてしまうのですから、京の人々はさぞ驚いたことでしょう。駅舎では、団参列車の到着ごとに花火と楽隊演奏が行われ、長旅の参拝者を賑（にぎ）やかに迎えました。なお、大遠忌終了後は貨物駅として利用され、現在は梅小路公園になっています。

参拝者いろいろ

来たる750回忌大遠忌法要にも、内外からたくさんの門信徒が参拝なさることでしょう。当時は、時代を反映して朝鮮僧の団参や台湾先住民族の参拝が話題となりました。また、海外開教の先駆けとなったハワイからも遠路参拝者がありました。

さらに、現在の感覚ではなかなか理解しにくいのですが、この大遠忌には、他宗派の人々も団参に加わっていました。その様子を当時の新聞は「東北は西本願寺の勢力の少ない土地にして、二千八百人の内約二千人は禅宗、浄土、日蓮等の他宗派信徒にして、残る八百人ばかりが西本願寺即ち真宗信徒である」と報じています。この団参をご縁に帰敬式を受けた方も多く、新たな門徒獲得の機会となっていたようです。

100年前と今日

近代化による交通網の発展は、人の移動を大きく変えました。とはいえ、高速化・多様化が進んだ現在とは異なり、当時の境内・門前町界隈は参拝者であふれ、各鉄道駅は人の波でごった返したようです。しかし、それが逆に参拝者の意気込みとご開山聖人への熱い思いを感じさせます。また、法要期間中は、京都市中のここかしこで参拝者のお念仏の声が聞かれたといいます。

厳修まで１年を切り、いよいよ近づいてきた750回大遠忌法要。私達も100年前に負けないくらいの熱気でこのご勝縁をお迎えしたいものです。

（研究員　大田壮一郎）

写真資料
・「石井行昌撮影写真資料」…①（京都府立総合資料館寄託）
・「親鸞聖人650回大遠忌法要記録写真」…②③（本願寺史料研究所所蔵）

参考資料
・『遠忌大観』（中外日報社）
・『本願寺史』第３巻
・『大遠忌日報』（大遠忌日報社）

親鸞さまの道

当研究所主催の“親鸞さまの道”では、史実と伝承が織りなす豊かな「道」に着目し、親鸞聖人のご生涯をたどります。この「道」を実際に歩くことで聖人のご生涯に思いを馳せながら、寺院などの儀礼空間を体験し、聖人のみ教えを新たな気持ちでいただきませんか。今回は、①ご誕生から出家まで、②比叡山での修行時代、の２コースをご紹介しましょう。

コース① ご誕生から出家まで

本願寺 → ①三室戸寺 → ②日野誕生院 → ③西岸寺 → ④青蓮院門跡

青蓮院門前の大楠

概要 所要時間：約６時間（発／着は本願寺）　①～②は徒歩移動　②～④はバス移動

①：聖人の父日野有範隠棲の地。別名「あじさい寺」。①～②間は東海自然歩道を歩く。

②：聖人誕生の地。近辺に日野法界寺・日野家廟所。山手に上ると鴨長明の庵跡「方丈石」あり。

③：「ワラジ履きの御影」を伝える。九条兼実（聖人得度の師 慈円の兄）の娘玉日姫の墓。

④：聖人得度の地。慈円が住した天台宗の門跡寺院。童形「植髪の御像」あり。

コース② 比叡山での修行時代

本願寺 → ①横川谷 → ②西塔 → ③無動寺谷 → ④きらら坂

きらら坂より比叡山を望む

概要 所要時間：約７時間（発／着は本願寺）　①～②はバス移動　②～④は徒歩移動

①：聖人修行の地。慈覚大師円仁が開創。源信（『往生要集』著）以来の天台浄土教の拠点。

②：現在も厳しい行が勤められている。堂僧時代の聖人が常行三昧に励んだ地。

③：大乗院に聖人の身代わりとなった「そば喰い木像」がある。明王堂は千日回峰行者の拠点。

④：聖人が百日参籠に通った京への道。一部急坂もあるが、現在は２時間程で下山できる。

©SO

予告

一緒に歩こう“親鸞さまの道”

— 聖人ゆかりの地を 研究員・布教使 と一緒に歩きませんか —

※日時、コース等の詳細は、**Webサイト・宗報・本願寺新報** 等にて発表いたします

センター所長だより―― 第2回　御仏を礼拝する

『観経』はわが子阿闍世から牢に移された王妃韋提希夫人が、お釈迦さまに救いを求め、その韋提希夫人のために説かれたお経です。

すでに国王頻婆娑羅もまた牢に閉じこめられて飢死寸前にあります。王舎城においで下さったお釈迦さまに韋提希夫人は、身を投げ出し、号泣されて、「私は何の罪があって阿闍世を生んだのでしょうか、もうこのような苦しみにみちた世界が厭になりました。苦しみの無い世界に生まれたいと思います」とお願いして説かれた世界が、阿弥陀仏の浄土です。お釈迦さまは韋提希夫人に、浄土に往生する方法として「西方に思いをかけて、特に沈む夕日に想いをかけなさい」とお勧め下さいます。

韋提希夫人に、人生の大きな苦しみや、絶望的な苦しみにあるときに西方極楽浄土を想い日没の夕日を想いなさいとお勧め下さることは、とても大事なことをお教え下さっていると思います。私達がみ仏さまを礼拝するとき、一般にはあれこれ自分の願いがかなえられますようにと礼拝しますが、私達の親しんでいる『観経』では、我われの絶望的な苦しみからの解放は、大きな依り所に気づくことをお教え下さっているのです。仕事や生活に追われる私ですが、み仏さまを礼拝し、お念仏申す生活は、人生の大きな課題をのりこえる道に気づかせていただくことなのです。

浅井成海センター所長

研究活動の紹介 ―― 真宗儀礼論研究より リーフレット配信のお知らせ

当研究所HPにおきまして、6月よりリーフレット『お盆』・『お彼岸』・『除夜会／元旦会』のデータ公開を予定しております。PDF形式ですので、ダウンロードしてご参拝の方にお配りいただけます。詳細は、当研究所HPまたは教学伝道研究センター事務局まで（奥付参照）。

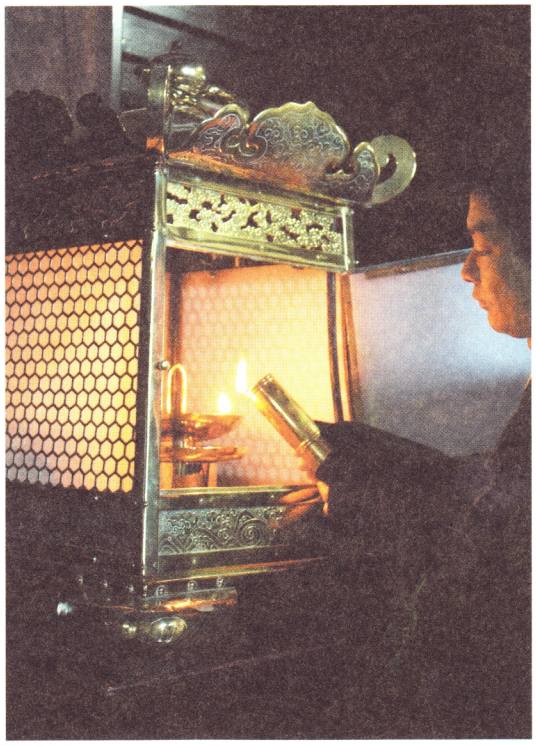
歴史と功徳について

歴史とお墓まいりについて

除夜会／元旦会は制作中です。
（12月1日up予定）

表紙写真の解説――本願寺の常灯明（法灯）

親鸞聖人の灯――表紙の写真は、本願寺の御影堂と阿弥陀堂の後堂にある「常灯明」（写真左）と「輪灯」（写真右）です。これは、親鸞聖人から伝わる灯りを、油（菜種）に移して絶やすことなく、今日まで守り続けるものです。常灯明は、関係者以外は立ち入ることのできない場所にあり、一般には知られていませんが、親鸞聖人のみ教えの象徴として、「法灯」とも呼ばれています。



常灯明の様子

今年の９月16日（16日は親鸞聖人のご命日）、常灯明を分燈し全教区を巡る「安穏灯火リレー」が始まります。全国各地に灯が運ばれ、来たる親鸞聖人750回大遠忌法要をお迎えいたします。かつては、親鸞聖人ご誕生800年・立教開宗750年慶讃法要の時（1973〔昭和48〕年）にも分燈され、この灯のもとで法要が勤められました。

現在、この常灯明を絶やさず守り続けているのは、式務部と呼ばれる専門職です。今ならば、自然災害による鎮火が、もっとも危ぶまれることでしょう。では、太平洋戦争の時はどうだったのでしょうか。当時、式務職だった方のお話では、配給制になった貴重な油を節約するために、輪灯に点火している間は常灯明を消し、全ての勤行が終わった後、再び常灯明に灯りを戻し、朝まで保ったそうです。

また、御影堂の西側に位置する瞰池亭という建物の下には防空壕が造営されており、空襲時には、御真影（親鸞聖人の木像）と共に常灯明を避難させる備えがありました。その際の移送手段は、ランプ、あるいは携帯用懐炉とも言われており、定かではありません。というのも、京都は大規模な空襲を受けなかったため、避難させる機会がなかったからです。そして今や、この話を知る人は、本願寺でもほとんどおりません。

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター 第11号

発行日：2010（平成22）年６月10日

編　集：本願寺仏教音楽・儀礼研究所

発行者：浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター　所長・浅井成海

〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地　本願寺第３庁舎内

Tel.：075-371-9244　Fax.：075-371-5761

http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/

頒　価：無料

協力・写真提供：浜屋株式会社、いんのた婦人会、大川青年会、京都府立総合資料館、河音琢郎、本願寺史料研究所（掲載順）